

# エビデンシャルティとモダリティ・ アスペクトのインターフェース

——「のだ」「ている」を例にして——

黒 滝 真理子

## 1. はじめに

従来、エビデンシャルティ (Evidentiality: 証拠性を表すマーカー) はモダリティの下位区分であるという見方が主流であった。近年では、エビデンシャルティと認識的モダリティ (Epistemic Modality<sup>1</sup>: 命題の可能性や必然性に関して話し手の査定を表すマーカー) は関連性がないものとする捉え方もある一方で、日本語の「ている」のように、エビデンシャルティがテンス・アスペクトやモダリティと同一の形態素で表されるという視点からの研究もおこなわれている。本稿では、エビデンシャルティと認識的モダリティがどのように関わっているかを論じる。さらに、元来アスペクト形式である日本語の「のだ」や「ている」がエビデンシャルティを含意することから、エビデンシャルティ、認識的モダリティとアスペクトの間にはインターフェース (接点) があることを述べていく。その上で、日本語のエビデンシャルティの位置付けを再検討する。

## 2. エビデンシャルティ (Evidentiality) とは

エビデンシャルティとは、(1) にも示すように、情報源 (information source) がどのようなものか、すなわち情報の出処・情報の入手源によって表現法を変える文法カテゴリーで、Franz Boas によって1911年にアメリカンインディアン言語について提唱された新たな概念である。具体的には、見たり、

聞いたり、何らかの痕跡に基づいたり、これまでの知識に基づいたりするものである。よって、知覚や経験といった実証的な情報源もあれば、推論する情報源もあり、また伝聞的な情報源もある。

- (1) Evidentiality is a linguistic category whose primary meaning is source of information. [...] For instance, one evidential typically refers to things one hears, smells and feels by touch.

Akhienvald (2004 : 3)

情報源について具体的に述べると、視覚 (visual)・非視覚感覚 (non-visual sensory)・推論 (inference)・想定 (assumption)・伝聞 (hearsay)・引用 (quotative) の6種類に分類される (Akienvald 2004 : 63-64)。これは、実際に見たり、聞いたり、実体のある証拠に基づいて推論したり、論理的推論・仮定・一般的知識に基づいて想定したり、他者からの情報に基づく伝聞や引用などが該当する。人間の知覚は見ることから始まるので、視覚が証拠性のプロトタイプということになる。

これらの情報源を整理すると、直接的証拠と間接的証拠に分類される。直接的証拠とは、話し手が自ら持った知識や自ら入手した情報などを知覚によって得て、瞬時に認識できるもので、直接経験と関わる。一方、間接的証拠とは、他人から報告された伝聞や記憶に基づく推論を伴うもので、間接経験と関わる。

Chafe (1986) は、言語によってエビデンシャリティの表し方が異なるという。この要因の一つに、エビデンシャリティには文法化され、文法のカテゴリーに入るものもあり、語彙カテゴリーに留まるものもあることがあげられる。概して、エビデンシャリティには①根拠となる情報源そのものを標示する機能と②情報源の出处を標示する機能の2つがある (Palmer 2001, Aikhenvald 2004)。ところが、日本語のエビデンシャリティは、情報源そのものというよりも、②の情報源の出处や情報の存在を示すために使われることが多い。

英語には、apparently といった副詞や look, seem などの感覚動詞以外、エ

ビデンシャルティを表す文法マーカーが少ないといわれている。それに対して、日本語にはエビデンシャルティが多く、日本語記述文法研究会 (2003:163-178) は、「ようだ」「みたいだ」「らしい」「そうだ」<sup>2</sup>「のだろう」「って」「だって」「んだって」「という」「とのことだ」「ということだ」「とか」などをエビデンシャルティとしてあげ、認識的モダリティ形式の類型の一つと分類している。この見方は、エビデンシャルティがモダリティの下位区分であるという立場に立脚する。その上で、「話し手が観察したことや証拠に基づく推定を表す形式類と伝聞を表す形式類に分かれる」(日本語記述文法研究会2003:163)と説明している。

日本語のエビデンシャルティに関わる先行研究をみると、全ての記述に「証拠」という用語が用いられているわけではなく、例えば、寺村 (1984:249) には「客観的な事実の基づく判断」、仁田 (2000:139) には「存在している兆候や証拠から引き出され、捉えられたもの」と述べられている。文修飾副詞の「一見すると」「見たところ」や「聞いたところ」などもエビデンシャルティのマーカーであるが、本稿では文末表現を分析するので検討対象としない。

### 3. エビデンシャルティと認識的モダリティの関連性

従来、エビデンシャルティは認識的モダリティの下位区分であると捉えられてきた。確かに、エビデンシャルティと認識的モダリティとは「推論」という概念で重なる点があるため、関連性があると考えerことで妥当性を得ることができる。事実、英語の *must* には認識的モダリティとエビデンシャルティの両義があり、両者は「推論」という概念で重なる (黒滝2019:145)。しかしながら、モダリティは話し手が関与する独話的なものであり、エビデンシャルティは主に聞き手を意識する対話的なものである。となると、モダリティとエビデンシャルティは極めて近いが、異なる概念を表していると考えられる。

エビデンシャルティと認識的モダリティとの位置付けに関しては、研究者によって異なる様々な捉え方がある。ここでは、3つの捉え方を紹介しておこう。

① モダリティ研究の第一人者である Palmer (1986) はエビデンシャリティと認識的モダリティを「命題的モダリティ (propositional modality)」の下位区分に位置付けている。すなわち、エビデンシャリティをモダリティに含まれる一部分としている。日本語学もこれに準ずるとして、主にエビデンシャリティを認識的モダリティの下位区分としている。

② Aikhenvald (2004), De Haan (2006) や Aikhenvald and Dixon (2014) はモダリティとエビデンシャリティとは関連性がなく、それぞれ独自の文法カテゴリーであるとする。事実、Bebee *et al.* (1994) や De Haan (1999) はエビデンシャリティをモダリティのカテゴリーから除外している。De Haan (2012) は直接経験を表すエビデンシャリティをモダリティよりもどちらかというテンスと関わりと分析している。

③ Narrog (2012) は、モダリティと evidentiality を重なる箇所があると捉えている。この立場を取り入れると、日本語の伝聞や様態などもモダリティとなる。

しかしながら、①や③のように「認識的モダリティとエビデンシャリティとは関連性がある」と短絡的に言い切れない場合もある。

(2) a. John is at home, because the light is on.

b. John may be at home, because the light is on.

(De Haan1999:9)

例えば、(2 b) で「ジョンの部屋は明かりがついているから、在宅かもしれない」の「かもしれない」を表す may は、認識的モダリティというよりも、because 節の「部屋に明かりがついている」が根拠を示しているのでエビデンシャリティであると考えられる。本来、認識的モダリティは話し手の推論を示すものであるが、エビデンシャリティは発話の根拠を聞き手に示すことで情報の信頼度を高めようとするものであり、聞き手を意識したものである。(2 b)

は根拠があって発話している点で(2a)の断定に近いともいえるが、聞き手を意識しているという点では断定と異なる。よって、エビデンシャリティと認知的モダリティは別個のカテゴリーとして捉えられる。これは②の捉え方と共通しており、その立場をとる理由の一つは、認知的モダリティが非現実性を表すのに対し、エビデンシャリティは根拠が明確であるので現実性に基づいていて、非現実／現実の対立関係にあるからと考える。そして、認知的モダリティは話し手による推論を強調する「話し手指向」であるが、エビデンシャリティは話し手と聞き手が共有できる情報に基づいての判断(shared mind)を表し、聞き手に情報の信頼度を示すという意味で「聞き手指向」である(黒滝2020)。さらに、もう一つの理由を説明すると次のようになる。認知的モダリティは確実性(certainty)、蓋然性(probability)や可能性(possibility)など、記憶や知識に基づき推論・推量する、といった話し手の判断を示す。一方、エビデンシャリティは、自分の目で見たり聞いたりした客観的な事実を踏まえて推定するものであり、Delancey(1997)も述べるように、推論と直接体験による知識に基づく。黒滝(2020)は認知的モダリティが用いられた文を「判断文」、エビデンシャリティが用いられた文を「体験文」と呼んでいる。

#### 4. エビデンシャリティと認知的モダリティのインターフェース

エビデンシャリティと認知的モダリティは別個のカテゴリーとして捉えられると前章で述べた。なぜなら、情報源には自らの知覚から得られ瞬時に認識できる直接的証拠と他者から得られる間接的証拠の2種類があり、それによって、エビデンシャリティと認知的モダリティの使い分けがなされていると考えるからである。例えば、情報の根拠や情報源が明示されていない場合は、自らの持っている知識や記憶に基づく知識などから推断するしかないので認知的モダリティが使われる。よって、情報源の直接性／間接性によって、証拠的モダリティか認知的モダリティかを使い分けるのである。確かに、証拠的モダリティと認知的モダリティとは別個のカテゴリーであるが、黒滝(2020)が論ずるように、相互補完的な関係にある。これは、両者間には「推論」という概念で重

なる部分があるからである。

「推論」の対立という観点から、証拠的モダリティと認識的モダリティを見てみよう。will / must について、Leech (1987) は、(3) の例を挙げて、‘prediction’ (予測) を表す will と論理的必然性を表す must とが代替可能であると説明している。

- (3) That *will* be the electrician—I’m expecting him to call about some rewiring. [on hearing the doorbell ring.]

(Leech 1987:84)

ただ、Bolinger (1977) の「形式が違えば意味も異なる」という言語学的基本理念に従うと、代替可能とはいえないことになろう。Palmer (1990:57-58) は「will は以前からの知識に基づいた妥当な推論, must は発話時に入手可能な証拠や情報に基づいた, あり得る結論」と区別している。この Palmer の説明によると, must は証拠や情報に基づいているわけでエビデンシャリティといえる。must がエビデンシャリティとして使われる例は (4) にもある。(4) の must も今泣いていることはその場で観察して得られた証拠であり, その発話時に入手した根拠 (直接的証拠) に基づいて推量していることを表している。must は推論する上での根拠・証拠がある場合に限り使用可能となる。

- (4) Mary *must* have a problem—she keeps crying.

(Swan 2005: § 359)

認識的モダリティの must は「～であるに違いない」と日本語で解釈するが, これはある意味「思い入れ」を含意している。「思い入れ」のような強い気持ちを表明するためには, 何らかの根拠や証拠となる情報が必要となる。澤田 (2006:212) も「認識的 must は, 意識主体が, 現時点で入手可能な直接的証拠に基づいて, p に違いないと「断定」することを表す」と説明している。

確かに、must を直接的証拠であろうが、間接的証拠であろうが、証拠に基づいて判断するなら、認識的モダリティとエビデンシャルリティの両義があるといえる。これは、認識的モダリティとエビデンシャルリティには「推論」という概念で重なる部分があるから、そのように錯覚するのかもしれない。つまるところ、認識的モダリティとエビデンシャルリティは推論の根拠の有無によって対立関係にあるということになる。推論には証拠を含まないで推量している場合と証拠を含んで推量している場合とがあるというわけである。したがって、認識的モダリティとエビデンシャルリティは極めて近いが異なる概念を表す、まさに似て非なるものであるといえよう。

次のような日本語の言語現象も興味深い。日本語には「ようだ」、「らしい」、「そうだ」のように文法化されたエビデンシャル・マーカーがある。三宅(2006:132)は、「ようだ」「らしい」の実証的判断に関して、「命題が真であるための証拠の存在を認識するというものであった。そして、その認識に至るまでに、広い意味での「状況」の中に証拠を見出し、その証拠と命題とを結び付ける過程、即ち「探索過程」が存在した」と述べている。すなわち、「ようだ」、「らしい」や「そうだ」は証拠から、あるいは証拠に基づいて、命題を推量したり、推論する認識的モダリティを表すものではないことが述べられている。

意味的側面からだけでなく、形式的側面から見ても次のような相違がみられる。(5 a) のように述語の終止形に「そうだ」がつくと伝聞を表すエビデンシャルリティとなり、(5 b) のように「そうだ」が連用形につくと推量を表す認識的モダリティとなる。

- (5) (a) 新型コロナの感染拡大により、明日から自粛生活になるそうだ。  
 (b) 新型コロナの感染拡大により、明日から自粛生活になりそうだ。

(5 a) は終止形「なる」で言い切ることにより他者から得られた内容であることを暗に示し、「そうだ」を付加することで聞き手に情報の信頼度を示している。(5 b) の「なりそうだ」はあくまでも話し手の推量に言及している

に過ぎない。

## 5. エビデンシャリティを表す「のだ」

エビデンシャリティとモダリティの関連性だけでなく、アスペクトとエビデンシャリティの関連性にも触れるために、5章と6章では、アスペクトの文法マーカーである「のだ」と「ている」がエビデンシャリティをも表すことを述べていく。

エビデンシャリティには①根拠となる情報源そのものを標示する機能と②情報源の出处と情報の存在を標示する機能の2つがある。例えば、「ようだ」「らしい」「(し) そうだ」「みたいだ」は証拠の存在に焦点をあてている。「という」「とのことだ」「って」は情報源そのものに焦点を当てている。では、エビデンシャリティとしての「のだ」は専ら何に焦点をあてているのだろうか。

日本語のエビデンシャリティは、情報源の出处を示すため、人称と深く関わっている。つまり日本語はエビデンシャリティでもって人称を区別しているともいえる(黒滝 2019)。この点については7章で詳述する。元来、話し手の何らかの態度を表すムード<sup>3</sup>やアスペクト形式である「のだ」や「ている」も人称を区別するために使われる場合があり、これはエビデンシャリティのカテゴリーに入る。

従来「のだ」はモダリティ形式であるか否か、「のだ」自体に意味があるか否かなど、多すぎるほどの議論がなされてきた。野田(1997:12)にも「名詞化の機能を持つ準体助詞『の』に『だ』が後接し、それが一語化したものと、諸説は一致している」と述べられている。そのような「のだ」を、寺村(1984)は「説明のムード」、益岡(1991)は「説明のモダリティ」と呼ぶ。

「のだ」は元来、形式名詞の「の」に助動詞の「だ」がついた形であるとされてきたが、現在では形式名詞としての「の」の性質は失われ、「のだ」一語で助動詞のような働きをすると捉えられている。しかしながら、本当に「の」は本来の形式名詞の性質を失ってしまったのだろうか。「の」によって体言止めにすることにより、ある事態(コト)を表し、それに助動詞の「だ」を付け



ることで、「その事態の妥当性を判断した」ことを表していると考えれば、「の」の性質は保持されているということにならないだろうか。

(6) 花子が泣いている。大事にしていたカードがなくなったのだ。

(益岡1991: 139)

(6) の例文の「のだ」に対して、「花子が泣いている」ということの「説明」として、「大事にしていたカードがなくなった」という叙述を与えていると益岡 (1991: 139) は述べている。この例文を英語で表現すると、(7) のように「のだ」は現在完了で表される。

(7) Hanako is crying. She *has lost* her treasured card.

このような意味的側面からの捉え方のほかに、野田 (1997) は、ムードの「のだ」に対事的ムードと対人的ムードの2種類を認め、「状況や先行文脈との関係づけ」を表すものと表さないものとの分類している。状況や先行文脈が根拠・証拠となり発せられると考えると、エビデンシャリティのカテゴリーに入るといえよう。

「のだ」の「の」は、文を名詞化する機能を持つとあったが、野田 (1997: 231) に述べられているように、英語では “It is that … (実情は～なのである)” の *is* が「だ」で、*that* が「の」なのである。*that* 以下の命題内容は話し手の根拠に基づいて推論した結果を表している。

(8) a. *It is that* I have my own business to attend to.

(実は私には自分の用事があるのです。) (ジーニアス英和辞典 3<sup>rd</sup>:1939)

b. *It may be that* you are right. (=It is possible that you are right.)

(あなたは正しいのかもしれない) (Quirk *et al.* 1985: 223)

池上(1981)にも「ノデアル」類に対応する英語表現が“*It is that …*”であることが述べられていて、日本語の「のだ」と異なり、使用頻度が低いことに言及している。この場合の *It* は話し手が蓄積していた知識や先行情報を表している。この話し手自身が備えている知識や先行情報を表す *It* は、*that* 以下で表される話し手の根拠に基づく推論の結果としての命題内容と関連付けられる。根拠があるので、先行文脈をその根拠と関連付けて推論したうえで聞き手に伝えることができる。また、話し手の根拠に基づく推論によって導き出されているので、聞き手の知識だけでは知り得ない証拠と根拠を伝えているのである。証拠や根拠に基づいている点で、まさにエビデンシャリティを表し、「状況や先行文脈との関係づけ」の機能を果たしているといえる。八木(2019:157)は「発話の流れの中で、発話の見解を、先に理由を述べた後で「(だから) …なのです」と述べたい場合にも“*It is that*”が使われる」と説明し、“*It is that*”構文を「断定のモダリティ」と称する。断定とは証拠や根拠に基づいて下される判断であるのでエビデンシャリティと関わっている。

「のだ」の「の」は形式名詞で、「本を読むの(=こと)が好きである」のように、全体を名詞化するのが基本的な役割である。この例文のように、文中に現れた場合、その「の」に「だ」が結びつくことで、文末に置かれ、先行する節の内容を説明するものとして存在する。「説明」というより、(9)の例文のように、「決めつけるような強調するニュアンス」さえ感じられる。確定性を示す指標で、真偽判断に関わるものだとしたなら、モダリティといえよう。

(9) このように言えるのだ。

大竹(2009)には「「の(だ)」構文の提示する情報は、知覚(perception)と認識(cognition)という二項対立的観点から分けて考えることが可能である」(大竹2009:34)という説明があり、「のだ」に知覚領域に関わるものと認識領域に関わるものがあることを認めている。この知覚領域に関わる「のだ」がエビデンシャリティ、認識領域に関わる「のだ」がモダリティと考えられる。

さらに、命令のような強い意味を表す「のだ」がポライトネス表現として使われる場合もある。例えば、(10 a)「君は明日これを提出するんだ」の「んだ(のだ)」は命令として解釈される。話し手の決定判断を強く押し出す命令を表している。興味深いことに、これを英語で表現すると“You are handing in it tomorrow.”というように進行相で表され、命令機能に拡張した表現になる。一方、ポライトネス表現としての「のだ」の例が(10 c)で、(10 b)よりも「の」を入れた(10 c)の方が丁寧に聞こえる。このように「のだ」には語用論的機能もある。

- (10) (a) 君は明日これを提出するんだ。  
 (b) 説明してもらいたいです。  
 (c) 説明してもらいたいのの(ん)です。

(11 a) は勉強していたことを見たり聞いたりした結果、合格が事実であると話し手が確信したことを表す。これは現実性を表すエビデンシャリティである。因みに、(11 b)の「だろう」は推量しているに過ぎないので、非現実性を表す認識的モダリティである。

- (11) (a) 勉強していたから合格したのだろう。  
 (b) 勉強していたから合格しただだろう。

(11)の例から見ても、「の」は実質的意味がないのではなく、「の」自体がエビデンシャリティの指標となる場合があることがわかる。「状況や先行文脈との関係づけ」(野田1997)の機能をもつ「のだ」は、その状況や先行文脈が根拠・証拠となるわけで、まさにエビデンシャリティとして機能しているといえよう。

このように、「のだ」は「説明」というプロトタイプの用法から多様に意味拡張し、モダリティやエビデンシャリティの意味を派生している。これは、名

詞化する機能をもつ「の」が文脈によって多様な意味合いを担うためであると考える。

## 6. エビデンシャリティを表す「ている」

日本語の「ている」には (12) のように多様な用法がある。

- (12) a. 彼女は電話を切ってから、ずっと泣いている。(動作の継続)  
 b. 店が閉まっている。(結果残存)  
 c. 毎晩12時に寝ている。(習慣)  
 d. 彼女は幼少期アメリカで育っている。(経験)  
 e. 盛大な誕生日のパーティを5回もやっている。(回想)  
 f. 時間があれば、既に始めている。(反事実)  
 g. あの人への気持ちは冷めている。(形容詞的用法)

過去や未来の事態に言及する「ている」は次稿に譲るとして、現在を表す「ている」には大きく分けて次の2つにまとめられる。

- (13) a. 彼は今ヴァイオリンを弾いている。(動作の継続)  
 He is playing the violin now.  
 b. 彼は既に試験に合格している。(結果残存)  
 He has already passed the examination.

(13) のように、日本語の「ている」の意味は状態と捉えられる(井上2001:103)が、英語で表現すると現在進行形や現在完了で表され、アスペクトの文法カテゴリーに入る。「ている」は、時間的スパン(広がり)を表しているので、動詞に「ている」が付加されると、時間的スパンのある状態を表す。時間的スパン内で話し手が直接的に観察していて、その観察によって得られた情報が根拠となっている。定延(2006:169)も、「ている」は話し手の直接的観

察を表し、エビデンシャルリティの標識とみなされることを指摘している。アスペクトの文法マーカ―がエビデンシャルリティ用法へと意味拡張した例といえよう。

ただし、「ている」がエビデンシャルリティとして捉えられる条件としては、3人称主語であることが重要である。その場合、情報の証拠・根拠が観察によって得られたことを示す。一方、「私はもうあきらめている」「私は疑問を抱いている」のように1人称主語で「ている」を使うと、それはただ時間的スパンをもった状態を表しているに過ぎない。あるいは、自分のことを客観的に述べているに過ぎない。客観的に述べるにはそれなりの証拠・根拠が必要となる。

さらに、エビデンシャルリティの情報源は旧情報であるが、新情報が情報源となるとミラティビティ (mirativity)<sup>4</sup>に拡張する (Aikhenvald2012, Delancey2001)。例えば、「あ、雪が降っている」や「大変だ。あそこに人が倒れている」というように、話し手の驚きや発見を表す用法である。定延 (2006) は「ている」の意味を「観察すればこのようなデキゴト情報が得られる状態だ」とし、「「すれば」という仮想的な形であるが、「観察」という情報獲得手段を持ち込んでいる点で、エビデンシャルな仮説といえる」と論じている。さらに、定延 (2006) は、「ている」がエビデンシャルリティで使われている言語現象から「テイルは抽象性を嫌い、具体性を好む。観察対象を必要とする」といった特徴も挙げている。具体性とは現実的であるからいえることであり、現実性と繋がるものである。黒滝 (2019) も、認識的モダリティは非現実性に関わるのに対し、エビデンシャルリティは現実性に関わるということを示唆している。このような相違はあるものの、定延 (2006) の指摘する「観察対象を必要とする」というエビデンシャルリティの性質を考慮に入れると、「観察」によって話し手が発する情報が現在という発話時点に存在することを表している。その意味では「発話時における話し手の心的態度」を表すモダリティと親和性が高い。この点でも、エビデンシャルリティとモダリティにはインターフェースがあるといえよう。

さらに、定延 (2006) は、「テイルの意味の決定的要因はエビデンシャルリティであり、アスペクト的意味は結果的現象に過ぎない」と説明している。

「アスペクト標示がエビデンシャルティへと拡張した」と上述したが、定延(2006)の指摘に鑑みると、日本語においては、逆に「エビデンシャルティからアスペクト標示へと意味拡張した」といえよう。事実、ミラティビティはエビデンシャルティから意味拡張したものである。

日本語のミラティビティといえは、「気づき」「発見」の「た」がある。この「た」に相当する英語は現在完了で表されることが多い。例えば(14)のように、目標を達成した相手に「よくやった」「よく出来ました」と褒める際の「た」である。

(14) 全問正解した生徒に教師が褒めて

Wow, this is great. Well *done!* (= *You've done well.*)

(わー、すごい。よくやった)

この現在完了で表された「た」は「気づきという体験」を表している。気づきは新情報であるので、ミラティビティといえる。話し手が新たに確認・想起(再認識)したことを表している。新たな発見(気づき)と認識されるのは、自らの経験や過去に思っていたことが根拠(証拠)となり、その根拠(証拠)に基づいているのである。この点からも、ミラティビティはエビデンシャルティから意味拡張したといえよう。

つまるところ、元来アスペクトのカテゴリーに入っていた「のだ」、「ている」や「た」がエビデンシャルティやミラティビティをも表す。エビデンシャルティとして使われているアスペクト標識の「のだ」や「ている」に共通していえることは、実際に見たというような直接経験であるということである。2章で証拠性の2分類(直接的証拠と間接的証拠)について述べたが、黒滝(2019:148)も述べているように、証拠性には、間接的体験によるものの他に、話し手自身の「体験」に基づいて話し手のみが確認している、すなわち話し手だけが知っているからこそ言える直接的体験というものがある。直接経験とは、自ら持っている知識や自ら入手した情報などによるが、それらは知覚から得ら

れたことで、瞬時に認識するものであるので、「体験」といっても過言ではない。この場合エビデンシャルリティを表現し、それは直接的証拠に基づくのでそれだけ話し手の確信度は高いということになる。その意味でも、話し手の確信度が低い認識的モダリティとは異なる。一方、間接経験（推論、様態や伝聞）は、直接経験よりも時間的スパンをとって認識するに至り、記憶に基づき知識となっていく。その知識をもとに推論し、発話時には認識的モダリティを使って表現される。定延（2008）も〈体験（直接的体験）／知識（間接的体験）〉という枠組みを提示しているが、この間接的体験の〈知識〉こそが、知識を基にした話し手の判断を表す認識的モダリティと相通ずるものなのである。

したがって、少なくとも日本語において、エビデンシャルリティはモダリティともアスペクトともインターフェースがあるということになる。

## 7. なぜ日本語はエビデンシャルリティが発達しているのか

最後に、日本語において、情報源を明らかにするエビデンシャルリティが発達している理由を述べておきたい。

日本語は主観的把握型の言語であるため、「自己のゼロ化」が起こり、認知主体を明示しない表現が多い（池上2000）。よって、日本語の話し手は言語化されず、そのゼロ化された話し手の主体性を顕現化させるためにエビデンシャルリティが使われる（黒滝2019）。それは、エビデンシャルリティが情報の入手源・出处やそこに至るプロセスや証拠の在り方を示す働きがあるからである。すなわち、人称を知らしめ、認知主体との区別をするために、情報の入手源や出处を示すエビデンシャルリティを駆使するのである（黒滝2019:149）。エビデンシャルリティはある事態の情報の入手源を明らかにある文法カテゴリーであるので、(15) (16) の例文のように、とりわけ知覚や判断の経路を明らかにする。

- (15) (a) 私は歯が痛い。  
 (b) \*彼は歯が痛い。  
 (c) 彼は歯が痛そうだ。／彼は歯が痛いらしい。

- (16) (a) 私は、彼女がやったと思う。  
 (b) \*彼は、彼女がやったと思う。  
 (c) 彼は、彼女がやったと思っている。

(15b) や (16b) は非文であるが、(15c) や (16c) のように、「そうだ」、  
 「らしい」や「ている」などのエビデンシャル・マーカーを付加すると人称制  
 限から解放される。因みに、「のだ」にもこのような人称から解放される機能  
 がある。日本語で他人の内的認識を表す場合、情報の入手源や出処を示すエビ  
 デンシャルティで補う必要があるからである。これは、日本語のエビデンシャ  
 リティが人称代名詞の代役を果たしていることを物語っている。(15a) や  
 (16a) のように、1人称であれば、証拠による裏付けの必要はないが、3人  
 称であれば証拠に基づいての報告や伝聞であることを伝える必要がある。

逆に、例えば、(17) は人称代名詞こそないが、エビデンシャルティの存在  
 によって3人称が主語であることを知らしめている。

- (17) 淋しそうだ。  
 淋しいようだ。  
 淋しがっている。

よって、日本語のエビデンシャルティは認知主体を示すために人称代名詞の  
 代わりに使われ、認知主体を暗示する働きを担っているのである。エビデン  
 シャリティによって「自己のゼロ化」が起こりやすくなるとも解釈できよう。

一方、英語の文では統語上の性格から（たとえ無生物主語であっても）必ず主  
 語を置き、認知主体が明らかになる。敢えて人称の区別を示すエビデンシャ  
 リティを使う必要はない。そこで、英語ではエビデンシャルティはそれほど発達  
 しておらず、モダリティが発達していると考えられる。

総じて、日本語のエビデンシャルティは人称代名詞と深く関わっているため、  
 主語を省略することの多い日本語にとっては無くてはならない存在といえる。



それゆえ、日本語のエビデンシャルリティは多様に発達し、文法化も進んでいるのである。

## 8. おわりに

概して、エビデンシャルリティとは情報源を示すもので、その情報を話し手がどのように知り得たかを聞き手に対して示すものである。この「話し手と聞き手とのインターアクション」という観点から、従来認識的モダリティのように捉えられてきた。本稿では、そのようなエビデンシャルリティの位置付けを再検討した結果、エビデンシャルリティと認識的モダリティは「推論」や「体験」というインターフェース（接点）こそあるにせよ、別個のカテゴリーであることが分かった。その理由として考えられることは、認識的モダリティが非現実性を表すのに対し、エビデンシャルリティは現実性に基づいていること、認識的モダリティが「話し手指向」であるのに対し、エビデンシャルリティは「聞き手指向」である。もう一つの理由として、認識的モダリティが記憶や知識に基づいて推量する「判断文」であるのに対し、エビデンシャルリティは客観的な証拠・根拠を踏まえて推定する「体験文」であることが挙げられる。

さらに、日本語はモダリティやアスペクトからエビデンシャルリティへ、そのエビデンシャルリティからミラティビティへと意味拡張し、モダリティやアスペクトとインターフェースの関係にあるエビデンシャル・マーカースが多種多様に存在することを考察した。具体的には、アスペクトの文法マーカースである「のだ」と「ている」を取り上げ、エビデンシャルリティとしても使われる用法をみた。さらに、エビデンシャルリティの下位区分として直接経験と間接経験の2種類を提示した。「のだ」と「ている」に共通して言えることは、実際に見たというような直接経験を表し、エビデンシャルリティのカテゴリーに入るものもある。直接経験であればエビデンシャルリティ、間接経験であれば認識的モダリティという区別がなされるということになる。

日本語のエビデンシャルリティは、情報源そのものよりも、情報の存在、入手源や出処を示すために用いられる場合が多い。そのため、日本語はエビデン

シャリティを駆使して、人称を知らしめ、認知主体を暗に示している。このことも、アスペクト・マーカである「のだ」や「ている」がエビデンシャリティとして使われることの証左となろう。以上のことから、日本語において、エビデンシャリティはモダリティのみならずアスペクトともインターフェースがあるといえる。

## 註

1. 認識的モダリティ (epistemic modality) における epistemic という用語は、「知識」を意味するギリシャ語の epistēmē に由来する。よって、epistemic modality とは、本来「知識」に関する論理を扱う認識論理学 (epistemic logic) で用いられる用語である。認識的モダリティは命題の事実性に対する話し手の判断を表す。
2. 「そうだ」には、伝聞の「(する) そうだ」と感覚的情報に基づく様態の「(し) そうだ」がある。
3. 日本語の認識的モダリティは、英語のような様相論理学の可能性／必然性の概念から生じた modal system とは異なり、尾上 (2001) のいう「非現実事態を語る述定形式」の一つであり、ムード (mood) として捉えられる。
4. Mirativity とは、伝達する情報が話し手・聞き手にとって「意外」や「驚き」を表す文法マーカである (DeLancey1997)。日本語訳として定着したものは未だ存在しないので「ミラティビティ」と呼ぶ。

## 参考文献

- Aikhenvald, A.Y. (2004) *Evidentiality*. Oxford: Oxford Univ. Press.
- Aikhenvald, A. Y. (2012). The essence of mirativity. *Linguistic Typology*, 16(3), 435-485.
- Aikhenvald, A.Y. and R.M.Dixon. (eds.) (2014) *The Grammar of Knowledge; A Cross-Linguistic Typology*. Oxford Univ. Press, Oxford.
- Bolinger, D.L. (1977) *Meaning and form*. London: Longman.
- Bybee, J.L., R.D.Perkins and W.Pagliuca (1994) *The Evolution of Grammar: Tense, Aspect and Modality in the Language of the World*. Chicago/London: Univ. of Chicago Press.
- Chafe, W.L. (1986) Evidentiality in English conversation and academic writing. In Wallace L. Chafe and Johanna Nichols. (eds.) *Evidentiality: the Linguistic coding of epistemology*, pp.261-272. Norwood: Ablex.
- De Haan, F. (1999) Evidentiality and Epistemic Modality: Setting Boundaries. *Southwest Journal of Linguistics* 18(1) : 83-101.

- De Haan, F. (2006) Typological approaches to modality. In: Frawley, William (ed.) *The expression of modality* 27:40-69. Berlin: Mouton de Gruyter
- De Haan, F. (2012) Evidentiality and Mirativity. In R.I.Binnick (ed.), *The Oxford Handbook of Tense and Aspect*. pp.1020-1046. Oxford: Oxford Univ. Press.
- Delancey, S. (1997) 'mirativity': The grammatical marking of unexpectedness information. *Linguistic Typology* 1, 33-52.
- Delancey, S. (2001) The mirative and evidentiality. *Journal of Pragmatics* 33, 369-382.
- 池上嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学—言語と文化のタイポロジーへの試論—』大修館書店.
- 池上嘉彦 (2000) 『「日本語論」への招待』講談社.
- 井上優 (2001) 「現代日本語の「タ」—主文末の「…タ」の意味について—」つくば言語文化フォーラム (編) 『「た」の言語学』 97-163. ひつじ書房.
- 黒滝真理子 (2019) 『事態の捉え方と述語のかたち—英語から見た日本語—』 開拓社.
- 黒滝真理子 (2020) 「第14章 事態把握とモダリティ」, 『言語研究の革新と継承 4, 認知言語学 I』 331-355. ひつじ書房.
- Leech, Geoffrey N. (1987) *Meaning and the English Verb*. 2<sup>nd</sup>. London: Longman.
- Leech, Geoffrey N. (2004) *Meaning and the English Verb*. 3<sup>rd</sup>. London: Longman.
- 益岡隆志 (1991) 『モダリティの文法』 くろしお出版.
- 三宅知宏 (2006) 「「実証的判断」が表される諸形式—ヨウダ・ラシイをめぐって—」 益岡隆志・野田尚史・森山卓郎 (編) 『日本語文法の新地平 2 文論編』 119-136. くろしお出版.
- Narrog, H. (2012) *Modality, Subjectivity and Semantic Change. A Cross-Linguistic Perspective*. Oxford: Oxford Univ. Press.
- 仁田義雄 (2000) 「認識のモダリティとその周辺」 森山卓郎・仁田義雄・工藤浩 『日本語の文法 3 モダリティ』 81-159. 岩波書店.
- 日本語記述文法研究会 (編) (2003) 『現代日本語文法 4: モダリティ』 くろしお出版.
- 野田春美 (1997) 『「の(だ)」の機能』 くろしお出版.
- 大竹芳夫 (2009) 『「の(だ)」に対応する英語の構文』 くろしお出版.
- 尾上圭介 (2001) 『文法と意味 I』 くろしお出版.
- Palmer, F.R. (1986) *Mood and modality*, Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Palmer, F.R. (1990) *Modality and the English Modals* 2<sup>nd</sup>. London: Longman
- Palmer, F.R. (2001) *Mood and modality* 2<sup>nd</sup>, Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- 定延利之 (2006) 「心的情報の帰属と管理—現代日本語共通語『ている』のエビデンシャルな性質について」 中川正之・定延利之 (編) 『言語に現れる「世間」と「世界」』 167-192. くろしお出版.
- 定延利之 (2008) 『煩惱の文法—体験を語りたがる人びとの欲望が日本語の文法システム

をゆさぶる話―』ちくま新書.

澤田治美 (2006) 『モダリティ』 開拓社.

Swan, M. (2005) *Practical English Usage* 3<sup>rd</sup>. Oxford: Oxford Univ. Press.

寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』 くろしお出版.

八木克正 (2019) 「第9章 断定のモダリティ表現 “it is that” の特性」 住吉誠・鈴木亨・

西村義樹 (編) 『慣用表現・変則的表現から見える英語の姿』 146-161. 開拓社.